

戦後日本文学における西洋人のイメージ

Images of the European in post-war Japanese literature

鶴田欣也*

Japan accomplished her modernization at a breakneck speed by absorbing things of the West—science, technology, education, law, etc. However, when it comes to dealing with Western people, it is a different matter altogether. Japan has shown toward hakujin or white people extremes of reactions ranging from abhorrence to fascination. Japan's geographic insularity and essentially homogeneous population have much to do with her inability to look at Westerners as real people. Historical events such as the Tokugawa isolation policy and World War II may also have contributed to it. In the present Japan where there are 10,000 Japanese to every Westerner there exists a milieu that allows room for fantasized images of hakujin. The images often have less to do with the reality of Westerners than with the Japanese emotions varying from fears of to aspirations to be like the West. It is my belief that these images are best expressed in both highbrow and popular fiction.

* TSURUTA Kinya, ブリティッシュ・コロンビア大学教授

日本の近代化の過程において、西洋のものを理解し吸収することは比較的容易だったようであるが、それが西洋のひとつとなると、そう簡単ではなかった。実際、日本人一般には西洋人（ここでは主に白人）をごく普通の人間として見ない傾向がある。西洋人にたいする日本人の反応は動物的嫌悪から神神しい崇拜の感情まで、極端であって、人間的な中間の感情が欠如している。

こういう傾向が生まれた理由はいくつかあると思われる。例えば日本の島国性、また、実質的には単一民族である国民性等は大きな要因である。それから、徳川時代の鎖国政策や第二次世界大戦等歴史上の事件も大いにそういう態度に寄与したものと思われる。さらに、日本人三千人にたいし西洋人一人というような現在の日本の状況だと、西洋人を現実の人間としてとらえることはむずかしく、そこに日本人一般が西洋人を空想化してしまう余地がでてくるのである。近代日本における西洋人像は実際の西洋人というよりも、未知のものにたいする恐れから女神の如く美しいと思われるものにたいする賛嘆まで、日本人の中にある種々な感情と結びついているようである。

西洋人にたいする様々な日本人の反応は文学作品によく現れている。極端な反応の代表的な例は漱石の『三四郎』のはじめの部分にある。主人公の三四郎は汽車で熊本を出て東京に向かう途中、汽車が浜松の駅に停まると、プラットフォームに西洋人が何人か立っている。

其うちの一組は夫婦と見えて、暑いのに手を組み合わせてある。女は上下とも真白な着物で、大変美しい。三四郎は生まれてから今日に至るまで西洋人と云うものを五六人しか見た事がない。其うちの二人は熊本の高等学校の教師で、其二人のうちの一人は運悪く脊蟲であつた。女では宣教師を一人知つて居る。随分尖がつた顔で、鱈^{きす}又は鮪^{かます}に類してゐた。だから、かう云ふ派手な奇麗な西洋人は珍しい許ではない。頗る上等に見える。三四郎は一生懸命に見惚れてゐた。是で威張るのも尤もだと思つた。自分が西洋へ行つて、こんな人の中に這入つたら定めし肩身の狭い事だらうと迄考へた。^{註(1)}

三四郎の頭の中には二種類の西洋人しかいない。醜い西洋人と美しい西洋人で

ある。両者とも三四郎の現実から遠く離れ、美しい西洋人の方は三四郎の存在を肩身せまいものになっている。

日本の小説に現れる西洋人の大半は三四郎の反応のように醜いか美しいかのいずれかに分類される。そこで醜い西洋人の方から見ていくことにする。加賀乙彦の「砂上」は東京のアメリカ人の家でハウスボーイをしている17才の少年の成長過程を描き出した短編小説である。或日主人公はアメリカ軍のキャンプの中にある映画館に連れていかれ、Gという兵士に紹介される。

前のほうの、兵隊の固まった席に近付くと濃い腋臭が空気を染めていた。通訳は誰かの名を呼び、見るからに逞しい、オラン・ウータンのように目の小さい口の大きな兵隊が振り向いた。その右隣の席が二つ空いており、ぼくらは腰掛けることができた。

オラン・ウータンはGという。ぼくが迷っているとGが手を差出してきたので握った。……Gの手は大きくて毛を一杯植え付けた野球のグローブを思わせた。^{註(2)}

ここでは西洋人と日本人との間に在る身体上の差、少なくとも主人公によってそう信じられた差が観察され、直喩とカリカチュアによって描かれている。日本の小説の中で一番頻繁に使われる類型化した身体上の差は、ここに見られるように、体臭・身体のサイズ、そして身体に生えている毛である。また、西洋人を描くのに動物のイメージがしばしば用いられる。例えば川端康成は『山の音』で熊のイメージを使って不思議な西洋人像を造り上げている。このシーンでは老人の主人公信吾は電車に乗っているが、駅でないところで電車は停止する。信吾は居眠りから覚めると、若い男娼を連れた巨大な白人が前に座っている。

外人は肩までのシャツで、赤熊のやうに毛だらけの腕を出してゐた。青年はそれほど小柄でもないのだらうが、外人が巨大なので、子供じみて見えた。腹が出張って、首も太くて、横を向くのも厄介なのか、青年のすがりつくのに全く無関心な風をしてゐた。恐ろしい顔つきだった。その血色のよさは、土色の青年のつかれをなほ目立たせた。

外人の年齢はわかりにくいだが、大きい禿げ頭や咽首の皺や裸の腕のしみから、自分の年と似たものではないかと、信吾は考へると、外国に来てその国の青年をしたがへてるのが巨大な怪獣のやうに感じられた。^{註(3)}

この場面を戦後の日本の象徴と解釈する向きもあるようであるが、逆のパラリズムを通して信吾の菊子との不自然な心理的關係を微妙に示唆したものだろう。信吾は後に自分こそが怪獣であることを悟る。白人を使うことで、不自然さ、怪獣性を表したものである。

野坂昭如の「アメリカ・ヒジキ」では、少年が緒ら顔のアメリカ兵に生まれてはじめて出会い、「白人いうの嘘やな、あら赤鬼や」^{註(4)}とつぶやく。野坂の場合は川端のように巧みな象徴を操作しているのではなく、「赤鬼」というのは、少年が白人というのに実際は顔の色が赤かったという驚きを素直に表したものである。川端の「怪獣」という言葉の選択に表されているように、「赤鬼」という野坂の言葉の選択も少年とアメリカ兵との距離を拡大したもので、こちら側と向う側との差を強調している。

頻繁に使われる西洋人の体臭もこちらと向うを引き離す効果的な距離操作の装置であるが大江健三郎の『個人的な体験』で主人公のバードはある東欧の外交官を小さなアパートに訪ねる。そこでバードが最初に気が付いたのはデルチェフの体臭である。デルチェフは身体の小柄の割には大熊の体臭だといっている。^{註(5)} また、倉橋由美子は「ヴァージニア」でいかに体臭というものが日本人と西洋人の間に距離を作るものであるか、もっと正確にいうと、この場合、ヴァージニアの体臭の欠如が距離をせばめるかを証明している。

わたしにとって他人の体臭はすなわち悪臭であって、それは他人の汚なさのしるしでもある。ところがヴァージニアは白人には珍しく無臭なのだ。そこでわたしはヴァージニアが好きになれたのかもしれない。^{註(6)}

日本の小説における西洋人像は否定面ばかりではなく、尊厳、力強さ、美しさ等の肯定面も非現実的に拡大されている。例えば前出の『個人的な体験』のデルチェフは体臭は強烈であるが、人間の良心と尊厳の権化として描かれている。また、主人公が人間としての良心を取り戻す際デルチェフは重要な役割を

果している。「アメリカ・ヒジキ」では社会科の教師が日本の敗戦を日米の体格の差に帰しているのは興味深い点である。

「アメリカ人の平均身長は一米八十、日本人は一米六十、二十糎もちがう、万事この差やな、これが敗因やとわしや考える、根本的な体力の差というもの、必ず国力にあらわれるものなんや」^{註(7)}

こういう感情を反映して、「アメリカ・ヒジキ」の主人公も生まれてはじめてアメリカ人を見た時、次のようにいっている。

今見るアメリカ兵は、腕丸太ん棒腰は白みたいで、なんやしらんがこっちの国民服とは段ちがいの、^{つや}艶やかに光るズボンに包まれた尻のたくましさ、俺は……このアメリカ兵にはかなわんと、むしろ讚歎して、そのえゝ体格をながめた。そして、ああ、日本は負けたんや、こらまったく無理もない、なんでまたこんなでかいのと戦争してんやろ、銃剣術で突いても、木銃の方がポキン折れそうやないか……^{註(8)}

日本人の体格の劣等性はしばしば日本が抱えている大きな問題の原因としてあげられるのであるが、これは戦後だけの現象だけではなく、明治にまでさかのぼることができる。例えば、三四郎が汽車の窓から、美しい西洋人を眺めると、前に座っていた男が急に当時の日本の現状を弾劾しはじめる。そしてこの批判は日本人の顔についての美学に根ざしている。

「どうも西洋人は美しいですね。」と（男は）云つた。

三四郎は別段の答も出ないので只是あと受けて笑つて居た。すると髭の男は、「御互は憐れだなあ」と云ひ出した。「こんな顔をして、こんなに弱つてゐては、いくら日露戦争に勝つて、一等国になつても駄目ですね。尤も建物を見ても、庭園を見ても、いづれも顔相応の所だが——」^{註(9)}

そしてこのあとで髭の男は日本は亡びると予言する。

日本の小説の中では西洋人が美しいとなると普通の美しさではなく、この世のものとも思われぬ美しさである。小島信夫の「アメリカン・スクール」は日本人の教師達がアメリカの学校を見学した際の出来事を描き、終戦直後の日本人の西洋人にたいする劣等感をえぐってみせた。教師の一行がアメリカン・

スクールに着くと、そこはまるで天国のようだと思う。その中の一人、伊佐は背の高いアメリカの婦人教師をちらっと見ただけで、彼女は映画のスターのようだと思う。後に伊佐はこのアメリカ婦人を目の辺りで見る事ができるのだが、伊佐の反応は次のようなものである。

伊佐は目をあけるとはじめて間近にその婦人の食糧や物資や人種に恵まれた表情を見て、そのまぶしさに、これがおなじにんげんであり、教師であろうか、と彼は足のすくむようなかんじになり、ただ頷くことができるだけだった。^{註(10)}

アメリカ婦人の美しさで一種の麻痺状態になってしまう伊佐が西洋人の女性と一対一の恋愛をするということは想像しにくい。しかし、日本男性が文化的障害を乗り越え、白人の女性と恋に落ちたとすると、どのような心理的問題が起きてくるのだろう。異文化間、異民族間の問題を小説の中で追及している遠藤周作は「アデンまで」という処女作でひとつのケースを取り上げている。アデン行の船の上で、主人公はマルセーユを出る前に起きたフランス人の女性との恋愛事件を回想している。彼は女の輝くような白い肢体や流れるような金髪を鮮明に今でも覚えている、と同時に、ホテルの部屋の鏡に写った自分の身体も忘れることができない。

部屋の灯に真白に光った女の肩や乳房の輝きの横で、俺の肉体は生気のない、暗黄色をおびて沈んでいた。胸から腹にかけては、さほどでもなかったが、首のあたりから、この黄濁した色はますます鈍い光沢をふくんでいた。そして女と俺との躰がもつれ合う二つの色には一片の美、一つの調和もなかった。むしろ、それは醜悪だった。俺はそこに真白な艶^{はなびら}にしがみついた黄土色の地虫を連想した。その色自体も胆汁やその他の人間の分泌物を思いうかばせた。手で顔も躰も覆いたかった。^{註(11)}

日本の小説で西洋人が天上の高みに引き上げられ、日本人が矮小化されるケースが少なくないが、「アデンまで」ほど白人にたいする日本人の劣等感が生き生きと描かれている例を知らない。

今迄見てきた西洋人の例は多少の差こそあれ、いわゆる普通の人間の姿では

ない。それは熊のような怪獣であったり、そばにいる日本人の男を麻痺状態にするような女神のような存在である。西洋人にたいするこのような反応は日本人と西洋人はどこかで根本的に異なっており、この違いは乗り越えることができないものなのだという考えに根ざしている。そして、異民族の割合が極端に少ない、ほとんど同一民族で成形されている日本では、西洋人にたいするこういう考え方は不必要な恐れとか一方では滑稽なまでの讚美を生む土壤がある。こういう状態では日本の作家の頭の中で西洋人は人間としての資質を失い、作家のテーマを進めるためのシンボルとして動き始めるのだ。

近代日本文学においては西洋人像は非人間化される一般の傾向があるのであるが、その度合はそれぞれ作家によって個人差もあり、また、戦前と戦後ではかなり違ふと同時に、女流作家は男性の作家とは異なった視点で西洋人を観察しているように思われる。この論文では主に戦後の男性作家に焦点を合わせているので、ここでは林芙美子の『浮雲』の例を挙げるに止める。著者は主人公と若いG Iとの束の間の恋愛をこの作品に挿入しているが、この暗い小説の中でアメリカ人と一緒にいる時が主人公が明るく、自由に振舞える時であり、日本語は全く通じないにもかかわらず西洋人は生き生きとした一人の人間として描かれている。戦後小説の中の代表的西洋人とは対照に、戦前の小説に出てくる西洋人は前出の『三郎』のように主人公の精神風景の一部になっている。その一例は川端康成の西洋人の使い方である。『雪国』のロシア人の行商人、『名人』の中のアメリカ人の碁打ち等がすぐ頭に浮かぶ。うらぶれたロシア女は、後半に純粹さを失っていく駒子のパラレルであり、汽車の中のアメリカ人の碁打ちは、宗教的な臭いさえ漂わず名人との効果的な対照である。要するに川端の西洋人は『山の音』の巨大なアメリカ人を含めて、作品の背景の一部であり、また、それが、微妙に主人公の精神風景に影を投げかける仕組みになっている。

そういう点では戦前からの作家でも谷崎潤一郎の作品、特に『細雪』に出る西洋人はかなり異色である。シュトルツというドイツ人の家族やキリレンコというロシア人の家族は作品の全体に関係している一部であって、蒔岡家の伝統

的な価値観や美意識にたいする効果的な対照として働いている。また、谷崎は西洋人を通して、刻々と変化する世界の情報を自然になおかつ的確に提供している。しかも、これらの西洋人を作者は誇張、へりくだり、礼賛もなしに生き生きとした人間として描いている。これは日本の小説で西洋人を単なるアレゴリイや象徴としてでなく、日本人と同じレベルの生きている人間として取り扱った数少ない一例ではあるまいか。

第二次世界大戦、敗戦、連合軍による進駐等は西洋人に対する日本人の態度に深い変化をもたらした。主に軍人、兵士という形ではあったが、西洋人は以前とは違って日本中で姿を見かけるようになった。戦前のように、西洋人は単に物珍しい存在ではなくなり、色々な意味で、日本人の心理の底部に影を落とすようになった。そしてこのような傾向を反映する作品が多い。戦後文学の西洋人像は作品の単なる背景の一部だったり、シンボルであることを止め、構造上の重要な部分となり、読者の注意を直接にひく存在になった。なかには主人公の心理の襞の中にまでくいこんできたり、あるいは、遠藤周作の作品のように主人公の存在を脅かす例さえ出てきた。そうしたもうひとつの例は前出の野坂昭如の「アメリカ・ヒジキ」で、終戦後アメリカ兵との出合で男としての自信を失った主人公がそれを取り戻そうとする滑稽かつ哀れな様子を描いた作品である。主人公は「鬼畜米英」というスローガンなどで、戦時中教育を受けたが、終戦後アメリカ兵を目のあたりに見て、その巨大な体軀に衝撃を受ける。二十年ほど後に彼の西洋人にたいする劣等感ヒギンズというアメリカ人を自分の家の客にすることで再び浮上する。彼はヒギンズをミスタージャパンという有名な業師のいるセックスショウに連れていく。日本にもこういう者がいるのだぞという彼の精一杯の自己顕示でもあり、姑息で哀れな劣等感解消の手段でもある。ショウが進むにつれ、主人公は次第にミスタージャパンと心理的に同化していく。しかし、身体の大きなアメリカ人が側にいるため、ミスタージャパンはおびえ、男性としての機能を果たすことができない。この作品は主人公にとってアメリカ人という存在はどういうものなのかという感想で終わっている。

ヒギンズはやがてかえるだろう、だがヒギンズはかえっても、アメリカ人は一生俺の中に、どっかと居坐りつづけるにちがいない、そして俺の中の、俺のアメリカ人は折にふれ、俺の鼻面ひきずりまわし、ギブミチューインガム、キュウキュウと悲鳴あげさせる、これはこれ不治の病のめりけんアレルギーやろ。^{註12)}

「アメリカ・ヒジキ」の主人公が、男性としての機能を奪うようなめりけんアレルギーを内部に持って一生暮らさなければならぬのだが、小島信夫の『抱擁家族』の主人公にたいするアメリカ人の打撃はもっと直接的である。主人公の俊介はおそらく日本近代小説で西洋人によって妻を寝取られた最初の夫ではないかと思う。この作品のテーマは外国人の男と妻の不倫関係というよりも、主人公の家の崩壊である。しかし、外国人と妻の関係がこの家族の土台を揺がし、家族離散の遠因を作っていることは否めない。離散の過程で男性機能喪失がやはり起こるのであるが、「アメリカ・ヒジキ」のときのように、主人公の代理人（サーロゲイト）に起きるのではなく、主人公の俊介に直接起きるのである。妻と家族の友人の若いG. I.との不倫を知ったとき、俊介は心理的な傷だけではなく、自分の身体の一部が実際に痛むのである。

妙なところがずっと痛んで仕方がなかった。みちよがこの事件を洩らしたときにそうだった。彼の局部がはたかれたあとのように痛むのである。その痛さは下腹部から伝わり、その部分の中にもっていた。^{註13)}

のちに映画の中で西洋人が出てきたりすると、局部が痛んだりするのである。この痛みは俊介のある日突然起きたインポテンツと関係があるらしい。それは妻の時子が俊介にアメリカ人の相手の男、ジョージと同じような愛撫を求めたとき起きたものである。

俊介の予測どおり不首尾に終わったとき、時子がかすかな悲鳴をあげた。上半身をおこすと俊介は時子のそばからとびのき、自分の部屋にかけこんで倒れるように横になった。

そのうち時子のあくびがきこえた。^{註14)}

西洋人のジョージは戦勝国であるアメリカから来ている、そして俊介はその国

の文学を教えたり、翻訳して生計を立てている人間である。ジョージは若く、精力に溢れているが俊介は中年を過ぎかかっている。俊介はジョージのような仕方で妻を愛撫することができない。したがって、ジョージが俊介を去勢してしまったことになる。

「アメリカ・ヒジキ」でも『抱擁家族』でも、西洋人は主人公の個人的な感情の範囲で意義を持たされていた。しかし、大江健三郎は登場する西洋人に単なるプライベートな心理的な相互作用を越えた社会的な意味を持たせている。例えば前述した『個人的な体験』のデルチェフも主人公の感情よりは理性に働きかけて、主人公に責任をとらせている。「人間の羊」ではアメリカの兵隊と思われる西洋人が主人公を恥ずかしめる。バスに乗っていた兵隊の一人が主人公にズボンを下げることを命じ、裸の臀部をナイフでたたきながら、羊の歌を唄うのである。占領下の日本人の無気力さを羊にたとえて批判した作品なのだがこの衝撃的なシーンはそれなりに効果的ではあるが、アメリカ兵の行動に必然性がなく、人間らしさがないのは、多分作者がアメリカ兵を寓意的に使っているからであろう。このようなことは大江の『見る前に跳べ』の中に出てくるフランス人のジャーナリストにもいえる。このフランス人は明らかに大江の政治的、社会的思想を述べる代弁者である。したがって、野坂や小島の西洋人よりは大江の西洋人の方が知性の産物であり、主人公に劇的な関わりを持つにもかかわらず、紙細工のような感じを免れない。

戦後小説の中に出てくる西洋人像というのは現実的な西洋人の描写というよりはむしろ、戦後の日本人の心理、特に西洋人にたいする劣等感の^{くまどり}量取を表したものだといえる。そして、劣等感の裏には信仰に近いふたつの思い込みがある。ひとつは西洋人は日本より優れた文化文明の体現であるということ、もうひとつはその優劣の差はどんなにあがいても埋められない性質のものだということである。敗戦がこのような劣等感を強め、日本男性を去勢化するまで増大させたことは明らかだろう。

日本の小説に現れた多くの西洋人は文学的効果のため誇張され、生きている人間としての資質は犠牲にされた。しかし、そのような取扱をなんとか免れた

西洋人達も、筋の進行のため最初に出てきて、主人公の自我に打撃を与えるだけで消えてしまったり、最後までいても、日本人の主人公にとっては、終始まったく理解のできない存在であったりする。または、作者の思想の便利な代弁者で終わってしまうこともある。いづれにしろ、これらの西洋人は終戦後の日本人の精神的な外傷と去勢を示す劇的なメタファーとして効果的に使われている。

近代日本文学における西洋人像の全体を把握するためには、大衆文学も研究対象に入れることが望ましい。また、70年代、80年代に出てきた若い世代の作家群、また、山本道子、大庭みな子、米谷ふみ子等に代表される海外を材題にした小説にも目を向ける必要があると思われる。

また日本文学の中の西洋人像という課題はいろいろな外国文学における日本人像につき合わせて考えてみると面白くなると思われる。外国人に対する偏見は日本に限らず、あらゆる国や民族に共通するものだからである。戦中の「鬼畜米英」がある一方、「ドイツ人と日本人の違いは、ドイツ人はまだしも人間である」というアニー・パイルの有名な言葉があることを記憶にとめるべきだろう。

註

- (1) 『夏目漱石全集』第六卷『三四郎』岩波書店 1947年 p.24
- (2) 加賀乙彦『異郷』『砂上』集英社 1977年 p.110
- (3) 川端康成『山の音』新潮社 1957年 p.278
- (4) 野坂昭如『火垂るの墓』『アメリカ・ヒジキ』新潮社 1972年 p.24
- (5) 大江健三郎『新潮日本文学』64『大江健三郎集』新潮社 1969年 p.218
- (6) 倉橋由美子『倉橋由美子 現代の文学 32』講談社 1971 p.138
- (7) 「アメリカ・ヒジキ」p.25
- (8) 「アメリカ・ヒジキ」p.25
- (9) 『三四郎』p.15

- (10) 小島信夫『新潮日本文学 小島信夫集』新潮社 1972年 p. 238
- (11) 『遠藤周作全集』「アデンまで」新潮社 1981年 p. 390
- (12) 「アメリカ・ヒジキ」p. 55
- (13) 小島信夫『小島信夫集』新潮社 1972年 p. 14
- (14) 『小島信夫集』p. 16